が一切の思想の根底は、所謂「自己の崇拜」Le Culte du Moi にあつた。これは先づ彼の最初の小説『野人の眼前に』'Sous l'Œil des Barbares' にあらはれ、次で『自由の人』'L'Homme Libre' 『法の敵』'L' Ennemi des Lois' などに至つて、益々露骨に鮮明に示された。殊にこの最初の作などは、主人公の名もなければ勿論職業もない、家も國も、一定の住所も何もない。この男に取つて唯一の存在は何かといふと、それは自我即ち自分の心、唯だそれのみであつた。一切の外物と隔離して深く自己のどん底まで探つて行くと、そこにはじめて本當の内部生活が見出される。恰も土のなかの根の如く、粗鑛のなかの黄金のごとく、或はまた鑛山のダイヤモンドのやうに、そこに眞の自我といふ者が潜むでゐ

る。これこそ宇宙の根底であり、また唯一の實在であるといふのがこの一篇の眼目だ。主人公が青春五ヶ年の閲歴を叙して、歸するところは、即ち自我の權威を説いたものに外ならないのであつた。(勿論最近數年、この作者の思想は初期の頃のと稍々趣を異にした感はあるが、自我の權威を高調する點に於ては少しも變りはないのである)。

4 美の宗教

肉感美の崇拜——美と善の一致——希伯來思想との比較——肉體の美——男性美——ロデン——ペイタア——マイルド——ダヌンチオ——ピエル・ルイ——レオン・バクストの藝術——參考書

'Beauty is truth, truth beauty; —that is all
Ye know on earth, and all ye need to know'.
——Keats. *Ode on a Grecian Urn.*

美は眞なり、眞は美なり、是れ爾が地上に於て知り、また知るを要するすべてなり。(キィツ)。

'Art is the synthesis of beauty in Nature; and beauty is as serious as death itself'.
——Francis Grierson, *The Humour of the Underman*, p. 189.

藝術は自然に於ける美の綜合なり、美はその嚴肅なること死と異ならず。(フランシス・グリイアスン)。

美と藝術との宗教、ことに肉感美の崇拜、これがまた現代に現はれた異教思潮の顯著な一方面である。かの享樂主義といひ、快樂主義といひ、耽美主義といひ、藝術至上主義といひ、或は美的個人主義(エッセティク・インデヴヂュアリズム)といふ如き種々の名によつて呼ばれる傾向を、

今ここに總括して、すべて皆上に述べた希臘(ヘレニック)現世主義の當然の歸結たる美の崇拜を根本にして考へるのは、必ずしも無理でなからうと信ずる。

希伯來思想の特色は、既に述べた如く、ことさらに肉的生活の美と快樂に面をそむける禁慾主義にあつた。ちやうど佛教の言葉で色相界の妄執とか、煩惱とか云つたやうに、あらゆる物慾と肉情を否定した。之に反して希臘人の思想は全く現世の美を中心とし、美の極致はやがて自ら善と一致することを疑はなかつたが故に、かれらはことさらに道を說き德を奬める事をしなかつた。私どもが古代希臘の天才が遺した作品を讀むに當つて、特に强く注意を惹かれるのはこの耽美主義(エッセティシズム)の傾向に在る。

ホオマアの叙事詩にも Sappho（サフフオ）の叙情詩にも、また Herodotus（ヘロドタス）の歴史にも、アリストファアネスの喜劇にも、誰かそこに慈悲や正義の敎を聞く人があらうぞ。かの使徒保羅（パウロ）が自ら語り人に問ひ、聲を高くし涙を灑いで道を說いたのに較べると、哲人ソクラテスやプラトオンにさへも、道學先生臭味は甚だ薄かつたやうに思はれる。恁くの如くにして希臘が千古に誇るべき豐富なる藝術を遺したるに比して、古代の希伯來民族のそれは此點に於て驚くべく貧弱であつた。第一先づ肉體美を寫した彫刻といふ物を、彼等は持たなかつた。唯だ文學の方で舊約書に詩歌も戲曲もあるが、それも皆宗敎的なものばかり、僅に『雅歌』の一篇に肉體美の讚嘆を聞くに過ぎない（雅歌第五章自十節至十六節に男性美を、第四章自一節至七節に女性美を歌へる如

き例）。元來美感の著るしく發達してゐた希臘人は、美そのものによつておのづから自分の心の清くせられ高められる事を知つてゐたが故に、かれ等は人體美の極致 beau ideal を寫したる神像を造つて之を拜したのである。即ちかの一切の偶像禮拜を嚴禁した希伯來人とは、此點に於て全く正反對であつた。希臘人の宗敎的禮拜は、決して神の力に向つて祈り求めたのではなくて、美そのものを崇拜し讚嘆し、渴仰する者に外ならなかつた。ベイタアが名著『希臘研究』"Greek Studies"（二九五頁）に云つた言葉でいふと、希臘宗敎の中心動機は、全く「肉體の崇拜」the worship of the body にあつたのだ。何が故に希臘人は神靈に人間の體（からだ）を與へたかといふ問に對して、希臘彫刻の祖 Phidias（フイディアス）は答へて、天地

間に人體ほど整齊の美を盡くしたものは他に無いからであると云つた。とにかく人間の肉體は靜的美と動的美とを兼ね備へた最も完きものの一つであらうが、先づこの美に着目し、之を一切萬象の首位に置いて、神として肉體美を尊むだのは、全く希臘人を以て祖とする。

山水明媚の美鄕に住まつてゐた希臘人は、自然美に對してそれを讚嘆するよりは、寧ろ親しみ馴れてゐた。從つてかれ等が熱烈なる努力によつて求めむとしたる美は、主として人體の美であつたとラスキンは云つた（「近代畫家論」第三卷第四篇第十三章、自十二節至十四節。澤村氏譯「美術と文學」三〇三頁―三〇九頁參照）そこでさきにも云つた如く全く靈肉の一致を信じてゐた彼等は、この肉體美を得むが爲めに精神の修養をも其要素

だと考へた。換言すれば肉の美を得ることは、やがてこれがまた靈の向上でもある事を疑はなかつた彼等は、「王冠を得むよりは美しき肉體をこそ得まほしけれ」と言つた。また多くの點に於て普通の希臘風の物質的な考へかたと趣を異にしてゐたプラトオンでさへも、肉體美は精神美の表現だと說いて、哲學者の中でも詰らない奴は、先づその面貌が醜である、禿頭の侏儒であるなぞと書いてゐる。すべて恁ういふ考へかたを、かの中世基督敎徒が、五體を臭骸と見做して極力それを蔑むだのに比すると、眞に千里の差ではないか。

女性美は云ふまでもないが、希臘人は、キンケルマンの美術史に詳しく說かれたやうに、殊に男性美を貴むだ。それも顏面

ばかりでなくて、四肢五體すべての筋肉姿勢の美しさを貴むだ。かの五年に一度の Olympia（オリムピア）競技の如きも、今の世にいふ體育とやらの俗惡な動機からではなく、肉體の眞の訓練によつて身體各部の整つた美しい發達を見やうといふ催ふしに外ならなかつた。わけて男子が十五六歳の頃、いま漸く成熟期に入らうとする折の美しい血色や姿勢を、希臘の人は何よりも貴むで、美少年に關する多くの物語を後世に遺した。またスパルタ人の母は、自分の部屋にアポロや Narcissus（ナアシツサス）の美しい彫像を置いて、やがて生れやうとする胎兒がそれに似て美しかれよと祈つた。かほどまで肉體の美を貴むだればこそ、男性の美はフィディアス、女性美は Praxiteles（プラクシテレス）の作品に於て、希臘の彫刻は世界の藝術史上眞に

千古の偉觀をとどめ得たのである。

さてこの肉の美を崇拜する異教思潮の特色が、如何に力强く現代藝術の根本を動かしてゐるかは、今更ここに說く迄もなからう。その幾多の實例に至ては到底一々之を擧ぐるの煩に堪へない。かつて自然派時代の人が醜を見た所にさへ、今の新らしい藝術家は、更に深く其の奧に潛む內部の美を見ようとするではないか。自然のうち眞に全く醜なるものは一つも無いと云つた Rodin（ロデン）の如き、卽ち固より此精神の人であつたらう。彼が彫刻は人體の各部に溢れたる生命の力をとらへて、先人の未だ曾て氣づかなかつた運動の美を、筋肉や關節のうちに表現しやうとした。元來ロデンに取つては、生きてゐるといふ事それ自らが

既に美なのだ。ところがこの生命の現はれてゐるのは單に顏面の表情ばかりでなく、全身すべての筋肉運動にそ』の表現がある。だからかれはすべての肉の運動美を現はして、之によつて意志、思考、感激、興奮、情熱、想像等一切の精神活動を、自然のまに現はし得たのである。

また之はずつと古い話になるが、吾々は如何にして、人生の脈搏のうちから、最高の美の感覺を以て見られ得る凡てのものを見る可きだらうかと云ふ問に對して、そは藝術だと答へた英吉利のオルタア・ペイタ（讀者は先づ彼が「文藝復興」の「結論」といふ一文を精讀せられよ。なほかれの自叙傳とも見らるべき"Marius the Epicurean"にも同樣な思想が見られるが、この方は單に希臘風の美的快樂主義でないもつと複雜な思想が、殊にその結末の方に出てゐるから、また別の議論を要すると思ふ。）は云はずもがな、このペイタの哲學を實現し具體

化したるOscar Wildeの一生と其藝術も、ひろく讀者の知らるる通り、かの耽美運動の源であつた。ワイルドはあらゆる肉感の美を漁り、刹那の享樂を追ふた揚句、遂に獄中の告白錄に、われは我が生命の眞珠を酒杯のうちに投じ、笛の音を尋ねて花咲き亂るる道を歩むだのであると自ら語つたではないか。殊にかれの小說『ドリアン・グレイ』"Dorian Gray"にあらはれた新希臘主義の思想のごときは、要するに官能を以て靈性の根本なりと見、本能そのものが卽ち精神であり靈魂であつて、二者は全く合一したる存在を有することを示したものである。またかのD'Annunzioを見ても、彼は明かに最も著るしく靈肉の一致を信じた藝術家である。彼が純然たる生理の根底から人生を解釋し

て、美を感受する人であることは、『快樂兒』'The Child of Pleasure'や、『死の勝利』'The Triumph of Death' のやうな作を繙いた人の誰しも首肯する所であらう。Arthur Symons (アアサア シイモンズ) (Studies in Prose and Poetry のうちダヌンチオ論參照)の評語を借りて云へば、ダヌンチオに取つては、美は現實世界における最も現實的なもので、視たり觸れたり聽たりする所に、また吾々の情熱や渴仰のうちに、または個性の滿足を探求する執着のうちに、美を創造することが、卽ち生の最も大切なる部分であるのだ。(ダヌンチオの傑作で既に廣く日本の讀書界に行はれた石川戲菴氏譯『死の勝利』の如き、この耽美的肉的な希臘風の快樂主義をあらはした詞句は篇中の隨處に見られる。試みに石川氏の譯本五七一頁、六〇四頁より

六〇七頁まで、六一六頁より六一七頁などの部分を飜へし見られよ、思ひ半ばに過ぐるものがあらう)。

なほ最近の例をいふならば、佛蘭西の詩壇に今、異教主義 (ペイガニズム) の使徒だと呼ばれる Pierre Louys (ピエル ルイ) が古代希臘の美的生活を追慕して、その la grande sensualité をなつかしみ、希臘諸神を讃してその美と力と藝術とを頌する心も、卽ちみな此傾向の一面ではないか。また露西亞の猶太人で繪畫と舞臺裝飾に「色彩の叙情詩人」と呼ばれ、最近三四年西歐の藝苑を驚かしてゐる Léon Bakst (レオン バクスト) の藝術は、全く彼の希臘研究(特にホオマア研究)から出たものである。在來未だ嘗て見られなかつたやうな大膽な奇拔な色彩の配合に、躍動する生命の力を托し、觀者をして其强烈な刺戟に醉はしめず

むば止まないのが彼の作の特色である。衣裳や背景に使つた毒々しい色彩の絶叫が一種の symphony をなして、鋭く官能に迫る特色はかれが確に最近藝術界に於ける色彩の革命者を以て目せられる所以である。

（參考）希臘文明の近代に及ぼした影響を論じたものでは、下の書は一讀に値ひする。

"What Have the Greeks Done for Modern Civilization.?" The Lowell Lectures of 1908—1909. By John Pentland Mahaffy.
(G. P. Putnam's Sons, 1909)

之は詩と散文、建築彫刻、繪畫音樂、科學、政治法律、哲學宗教等にわけて論じてある。またし

"Heralds of Revolt, Studies in Modern Literature and Dogma". By William Barry.
(Hodder and Stoughton, 1909)

の終の三章、Chap. IX. Neo-Paganism. Chap. X. Later Day Pagans. Chap. XI. Friedrich Nietzsche.

なども參考になるだらう。但し私の所論は、少しもこれらの書に負ふ所は無い。

第六　EPILOGUE

現代文學の新潮

現代藝術の思潮――生活の愛慕と享樂――ヒユウマニスト――最近の佛蘭西文學――過去の人ヒエル・ロティ――新傾向――懷疑厭生の舊思想――實行的努力――人生の實際的方面と文藝の觸接――新傾向の代表作――家族主義――自我主義と共存主義――祖先の信念に歸ること――「人生派」の文藝――クロオデルの絶叫――その詩風――この派の諸家――ロマン・ロランの「ジアン・クリストフ」――加特力敎復活――希臘戰士の生活

'Le sage n'a qu'une croyance : soi-même; le sage n'a qu'une patrie : la vie'.

—Remy de Gourmont, *Une Nuit au Luxemlourg*, p. 155

賢人は唯だ一の信仰を有す、それは自己なり。賢人は唯だ一の祖國を有す、それは人生なり。（レミ・ドゥ・グルモン）。

I tell you that as long as I can conceive something better than myself I cannot be easy unless I am striving to bring it into existence or clearing the way for it. That is the law of my life. That is the working within me of Life's incessant aspiration to higher organization, wider, deeper, intenser self-consciousness, and clearer self-understanding.

—Shaw, *Man and Superman*, Act III. (p. 129)

元來僕は自分より好いものを考へ得られる間は、それを生み出すか、乃至はそれが爲めに途を開拓く樣につとめなければ心の滿足は得られない。それが僕の一生の法則、「生」の絶えない渴望の、僕の心の中に働いてゐる姿なんだ。絶えず一層高い組織、一層廣い、深い、强い自己意識、一層明瞭な自己理解に到達しやうと足掻いてゐる「生」の、僕の心の中に働いてゐる姿だ。

――ショウ「人と超人」（細田氏譯二九二頁）

現代藝術の特色は之を歷史的に考へれば、つまり基督敎思潮

に對する異教思潮の勝利に他ならない。靈肉の間に何等の分裂不調和を見なかつた古代希臘の人がしたやうに、現在の人生に對する熱烈なる愛慕と執着とを以て、向上し精進しやうとする自我の努力がその根底をなしてゐる。さう考へて見ると、かつてニイチエが說いた力の慾望（ヰルレ・ツウル・マハト）、今のベルグソンがいふ生の躍進（エラン・ヴィタル）、ショウのいふ生の力（ライフ・フォオス）、或はまたオイケンが精神生活の爲めの奮鬪 Kampf um einen geistigen Lebensinhalt を說く活動說（アクティヴィズムス）、これらはみな所說の內容に多少の差こそあれ、その間互に一脈の相通ずるところあるは否定すべからざる事實であると思ふ。

現代人の心は、レミ・ド・グウルモンの言葉で云へば、人生その者のために人生を愛するもの l'amour de la vie pour la vie elle-même

である。卽ち彼等は飽くまでも人生を肯定せむとするヒユマニストである。ヒユマニストであるが故に個人主義者であり、自我主義者であり、享樂主義者である。殊に靈と肉との合一を信ずる彼等は、精神生活の充實を求むるがために肉の歡樂を求めてやまない。その鋭敏な官能の力によつて生活內容を豐富にすべく、絕えず强烈の刺戟を漁り、瞬間の本能滿足を求めるのも畢竟之がためである。ペイタの名高い言葉を借りて云へば、「常に硬い寶玉のやうな焰を以て燃燒し、歡喜を持續すること」"to burn always with this hard, gemlike flame, to maintain this ecstasy 是れが卽ち現代の人々の得むとする生活である。そして恁くの如くして出來た花やかな豐富な生活のリズムを、かつて原始時代の人が

試みたやうな自然と無邪氣とを以て、之を言語に或は畫布の上に表現したものが卽ち現代の藝術である。まだ血の燃えてゐる心臟を其儘畫布の上へ投げ出したやうなのが後印象派(ポスト!イムプレッショニスト)の繪畫だとすれば、ロデンの彫刻も、Strauss(ストラウス)やDebussy(ドウビユツシイ)の音樂も、Craig(クレイグ)の舞臺裝飾も、Nijinsky(ニジンスキイ)等の露西亞舞踊も、本然主義(ナチユリズム)の詩人Saint(サン)-Georges de Bouhélier(ジヨルジ ドウ ブウエリエ)が詩集『熱烈なる人生の歌』'Chants de la Vie Ardente'も、英雄讚美の詩も、ひとしく皆靈肉合一の生命力が產み出したる新藝術ではないか。またマアテルリンクでもVerhaeren(ヴエルハアレン)でもH. G. Wells(エツチ ジ エルス)でもゴルスウオシイでもRegnier(レニエ)でも、現代詩文界の巨匠は、色々の意味に於てみな先づ第一に眞のヒユウマニストではないか。三千年このかた歐洲文明の根底をなしてゐた

欠

たとへば昨年(一九一三年)五月に出たOctave Mirbeau(オクタアヴ ミルボオ)の『野犬』"Dingo"などはその一例で、之などは矢張純粋の厭生主義破壞主義また極端な個人主義の所産である。しかし之などとは全く正反對の思想をあらはしたる下の如き最近の諸作を見よ、

Maurice Barrès(モオリス バレス)作、『靈感の丘』La Colline inspirée(一九一三年)

Henry Bordeaux(アンリ ボルドオ)作、『家』La Maison(一九一三年)

Paul Adam(ポオル アダム)作、『ステファニイ』Stéphanie(一九一三年)

これらは三つとも皆昨年あたり佛蘭西の文壇を賑はした名作で、また實際この新時代を代表する作家と作品とである。どれを見ても人生の實行的方面に對する熱愛と享樂の態度が明かに見られると共に、歡喜と光明とが全篇に溢れてゐるのが特色だ。殊

欠

にボルドオの『家』などは、以前からこの作者獨得の主張である家族主義の思想を基としたもので、さきの自然派時代の暗澹たる個人主義の思想とはちやうど正反對を行つたものである。なほ家族主義と云へば、モオリス・バアレスの『根引されたるもの』'Les Déracinés', ブルゼエの『舍營』'L'Étape, Estaunié の『酵母』'Le Ferment' など、これら近年の名作は個人の責任と義務とを重むじ、家族の連帶共存を中心思想としたものに他ならない。之等は上に述べた愛國主義と共に、現代新人の實生活に對する熱烈の愛が、具體的に顯現した當然の成果であると見るべきだらう。

ここに注意すべきことは、かの偏狹固陋な利己主義ならばいざ知らず苟くも眞の個人主義の自由な活動ならば、それは決して

社會的民族的共存主義と相容れないものではない、否な寧ろ積極的に自我中心の努力をしてこそ、それがまた自ら家族のためであり、國家のためであり、一般人類の爲めにもなるのだ。換言すればおのれの全力を發揮して自我の滿足を得やうとする事それ自身が、やがてまた熱情を以て同胞のために盡くす所以に他ならないので、眞の個人主義と利他主義との契合點は全くこの處に存する事を思はねばならぬ。それは人間一般の天性が社會的なものであり、狹い自己の小天地に立籠つて孤立した自己を守ることが、決して自我に滿足を與ふる所以でないといふ確固たる事實がある以上、一點の疑をさしはさむ餘地のないことである。にも拘はらずさきの自然主義時代の人には、極めて賭

易きこの論點を誤解した人が多かつたのである。

さてこの潑溂たる生氣に溢るる實行生活卽ち活動の前には、一切の懷疑といふ者が先づ一掃せられなければならぬ。始終疑惑の雲に鎖されてばかりゐた Hamlet のやうな男に、遂に何の强い實行が見られやうぞ。卽ち人には活動すべく先づ鞏固なる何等かの信念がなくてはならぬ。勇ましく「我は信ず」credo と云ひ得る人にしてはじめて實行の人であり得るのだ。そこでさきの自然派の懷疑時代を去つて、今や新思想の時代に入つた佛蘭西の新人は、先づ第一に、かれ等の祖先が千有餘年間それを基礎にして活動してゐた其信念に歸ること、retour aux croyances ancestrales を必要とした。この信念は實に單純である、まことに小

供のやうに單純である。が其單純なところにこそ强い活動の力が籠つてゐるので、以前の懷疑時代の人たちのやうに、唯だ屁理屈ばかりを列べてゐては疑惑を益々深くするばかりで、强い實行力の出やうがないのである。そして恁ういふ信念を基礎として生れた藝術こそ、卽ち最近文學の新潮を代表する人生派 L' École de la Vie の作物で、新詩人 Charles Péguy をして、一躍佛西詩壇の一方に雄視せしめた『ジャン・ダルクが慈悲の不可思議』'Le Mystère de la charité de Jeanne d'Arc' と、『聖なる群童の不可思議』'Le Mystère de saints innocents' の二大詩篇と、また最初から獨逸の方で頻に持囃された Paul Claudel が『新世紀を祝する五大頌詩』'Cinq Grandes Odes suivies d'un Processional pour saluer le Siècle Nouveau' と

は、共にこの壯烈な人生派の主張を宣言する獅子吼であつた。

クロオデルはこの詩篇に於て下のやうに叫むだ、

'O mon âme, il ne faut concerter aucun plan! O mon âme sauvage, il faut nous tenir libres et prêts, comme les immenses bandes fragiles d'hirondelles quand sans voix retentit l'appel automnal! O mon âme impatiente, pareille à l'aigle sans art! Comment ferions nous pour ajuster aucun vers? A l'aigle qui ne sait pas faire son nid même? Que mon vers ne soit rien d'esclave! Mais tel que l'aigle marin qui s'est jeté sur un grand poisson, et l'on ne voit rien qu'un éclatant tourbillon d'ailes et l'éclaboussement de l'écume!'

あゝわが精神よ、何等の成案に謀ることなかれ。あゝ粗野なるわが精神よ、自由なれ、常に身構へせよ、さながら聲なき秋の招きの響くとき、碎け易き燕の大群の飛ぶが如くなれ。あゝわが氣早なる精神よ、何の智巧もなき大鷲の如くなれ。或る詩を制作せむため、われ等は如何にかすべき。おのが巣を營むすべさへ知らざる大鷲の如くに。わが詩は何者にも風從することなし。されどかの海上の大鷲が、突如として大魚を拉し去るとき、人は輝ける翼の旋風と波のとばしりとを見るのみならずや。」

天空を行く猛鷲の自由なる生命力の迸發をその儘に詩にしやう、在來の型を破つて、全く藝術的本能と直覺とで行かうといふこの大膽な宣言は、よく人生派が制作の中心動力を喝破したものである。第一かれのversetといふ詩體が示すやうに、それは殆むど何等の拘束を受けない自由な散文であつて、唯だ呼吸の切れ目に段落があるばかりである。さて恁ういふ主張は、クロオデルの詩と戯曲との外に、詩人ではまたCharles Le Goffic, Henry Bataille, Porto Riche, Francis Jammes等にあらはれ、散文では、既に述べたモオリス・バアレスをはじめ、André Gide, Alphonse de Chateaubriant, André Suarès, René Boylesve, Marguerite Audoux, Charles Louis Philippe, Mme. Colette などの作に、その著るしき特徴を發揮してゐる。もとより

十人十色、毫も模倣踏襲のあとなき銘々獨創の個性を發揮した天才ではあるが、とにかく彼等が原始的な希臘人の古へに歸つて人生を享樂し、之に向つて、'yes' を唱へ、未來に希望を抱き意志の自由を信じ、自己の力を疑はず、訓練(ディシプリン)に服しながら而かも自由に、勇猛精進しやうといふ點に於ては、みな一致してゐる。かれらはさきの自然派の人々が人生に對して客觀的傍觀的態度を執り、「人生の斷片」'tranche de vie'(「近代文學十講」三〇六頁參照)を描くと云つたあのやうなまだるつこい行きかたをしない、直にこの流動し躍進せる絶えざる生命そのものの核心に突入して、さながら大鷲が海中の魚を拉し去るやうに、直に現實の中心生命に肉薄しやうといふ熱烈な態度を執るものだ。Henri Franck(アンリ フランク)の言葉で云

へば、『われは生の激流に身を投じて泳がう』'Je nagerai dan l'eau violente de la Vie' といふのが、まさに此派の根本的精神である。

私はまだこゝに、現代歐洲最大の作家と仰がれてゐる Romain Rolland(ロマン ロラン)の名を擧げなかつたが、彼は云ふまでもなく、この佛蘭西人生派の最も顯著なる大立者の一人である。さきに書肆丸善がこの人の大作 'Jean Christophe' の英譯四冊を、二十世紀最大の小說として廣告してからは、わが邦にも既に多數の愛讀者があらうと思ふが、あの小說に描かれた Beethoven(ベートホフエン)の樂天觀こそ、實に希臘に發した異教思想の結晶であると私は見てゐる。悲痛なる運命に屈せずに、ひたすら雄々しい態度を以て現在人生の奮鬪を續けやう、人は說(ドクトリン)なぞと云つてゐては駄目、唯だ運命に立ち

向ふその態度――心構へが肝腎だ、悲みに打勝つてのちの歡喜

Durch Leiden Freude 之が卽ち本當の人生味のあるところで、'Erotica' の音樂が卽ちそれではないか。この作者の寫したベエトオフェンは、飽くまで人生の有の儘を觀察して、その悲痛暗黑の相に雄々しくも面を向けながら、なほ自己の信念を失はず、人生を肯定し正面から立ち向ふ戰士の態度を取らうとしたもので、「生」のための奮鬪といふことがこの大作の中心思想である。（さきに述べたクロオデルの大驚の比喩をはじめて讀むだとき、私はこの「ジャン・クリストフ」のなかの下の言葉を想ひ出したことがある。L'art pour l'art! ..... Une foi magnifique! Mais la foi seulement des forts. L'art! Etreindre la vie, comme l'aigle sa proie, et l'emporter dans l'air, s'élever avec elle dans l'espace serain! ..... Pour cela, il faut des serres, de vastes ailes, et un coeur puissant. ――*Jean Christophe a Paris*, p. 134 之はぜんの參考に書きつけておく）

最後に私は、最近歐洲思想界の一隅にあらはれてゐる新加特力

教（また加特力復活とも云ふ）のことに就て一言しておかねばならぬ。この現象は獨り人生派の諸家に於けるばかりでなく、さきの象徵派時代の Huysmans 等の時分から既に著るしかつたので、また之は佛蘭西のみならず、英吉利の方でも、たとへば故 Francis Thompson が神祕思想を歌つた詩篇が、近頃になつて非常に持囃されてゐるのも、一つはこの加特力教の思想があるからだ。

ところがこれら新思想家、特にこの頃の佛蘭西文學に起つた加特力主義といふものは、昔からのとは甚しく趣を異にした全く異教化されたる基督教である。極めて實際的な現世的な信仰であつて、つまりは人生の實際的方面に於けるかれらの信念の根底をなしてゐるのだ。かれらの宗教信仰といふのは、或る場

合にはつまり一種の愛國心であり、神は祖國の擁護者だと見做されてゐるのだ。少しく極端に云ふと、かれらの神と云つてゐるものは、彼等の實生活における力の欲望（ホルレツクル・マハト）を神に寄せて、之をconcreteにした希臘風のものに外ならないのだ。恁ういふことに關してはいつも現代における最も大膽な批評家であるレミ・ドゥ・グウルモンの論文集『思想研究』'La Culture des Idées' のうちに、私は嘗て下のやうな言葉を讀むだことを想ひ起すのである。

Le catholicisme est le christianisme paganisé. Religion à la fois mystique et sensuelle, il peut satisfaire, et il a satisfait uniquement, pendant longs temps, les deux tendances primordiales et contradictoires de l'humanité, qui sont de vivre à la fois dans le fini et dans l'infini, ou, en termes plus acceptables, dans la sensation et dans l'intelligence.

——Gourmont, *Culture des Idées*, p. 136.

加特力教は異教化されたる基督教である。神祕的なと共に感覺

的な宗教であつて、從つて人生の二つの根本的な而かも相背馳せる傾向を滿足させ得るし、また長いあひだ滿足させて來た。卽ちその二つとは、同時に有限と無限とのうちに生きること、或はまたもつと都合のいい言葉で云へば、感覺のうちにと智のうちにと兩方に生きることである。

由來加特力教の信仰は肉感的傾向を帶びてゐるために、近代人の鋭敏なる官能をそそり易い。ところが肉的なと共に濃厚な一種の神祕的傾向を帶びてゐるのが、また新異教主義の特色だから、二者がこゝに相一致して、近頃の思想界の勢力となつた事は當然の結果である。

之を要するに二十世紀劈頭の文藝思潮は、自然主義以後の反動の勢をうけて、今しきりに强烈なる自我の創造と現在生活の充

實を要望してやまない。獨逸の言葉で所謂生命の火（レーベンスフオイエル）に燃ゆるもの、ベルグソンが所謂創造的進化の世界に不斷の向上をはかり、勇猛なる不退轉の努力に自己の心境を置かうとするものである。肉的に偉大なる英雄が、やがてまた靈的生活の崇高を伴うて、二者の間に渾然たる一致あり調和ある生活を見出すに至つて、ここに眞にわれ等をして、希臘英雄時代の戰士のおもかげを偲ばしむる者がある。

あゝ恁くてまた藝術の新潮は、花やかな異敎時代の昔に歸つて行くのである。

文藝思潮論終

文藝思潮論索引

文藝思潮論索引

あ

アノオド（マシカ）……九三・一三八・一四二
「アッサア王の歌」……九
アキリズ……一六三
アダム（ポオル）……二〇七
アダムス……五一
アティカ……一七
アポロ……一二・二九・六四―六五・一四七―一四八
「あらし」（テムペスト）……一七五・一七七・一九〇
亞剌比亞……一〇七
アリストオテレス……四三・七九・一〇六・一三二・一四五
アリストファネス……一七七・一八六
アレクサンドリア（歴山府）……三二・四〇・四一
アンテイアス……一七三
アンドレイエフ……一五〇

い、ゐ

以賽亞書……一六四―一六五・一七七
ギイナス……六三・六八・七五・一六五
一休和尚……五四
イブセン……三三―三八・一〇七・一二七・一六九―一七一
キンケルマン……一九・一四四・一八九
印象派……八七

う

ヴアジル……六二

ヴァティカン……八六
ヴォギュエ……一三八
運命觀……一四八—一五〇

え、ゑ

エスキラス……一七七・一七九
エピキュラス……四三
エポパ……一三・一六四・一七九
エラスケズ……八七
エリザベス朝……九八
エルス(エッチ・シイ)……二〇二
エルハアレン……二〇二

お、を

オイケン……一三三・一五八—一六〇・二〇〇
オオカッサンとニコレット……六二
オディセイ……一七六
オリムピア……一九〇

か

雅歌……一八六
加特力教復活……二一七—二一九
鎌倉時代……五三
カリギュラ……二二
ガリレオ……八一
カルデロン……五九・八四
「カルミナ・プラナ」……六六—七四
カント……一一三・一一八

き

キイツ……一八四
ギッボン……二二・三九
キングスレイ……四〇—四一
禁慾主義……一四・五三—五八・一八四

く

「クラシシズム」……一〇四—一一二・一四五—一四六
クリアスン……一二八・一八四
クルモン……一五四・一五六・一七一—一七二・一九八・二〇〇・二一八
クレイク……二〇二
クロオデル……二一一—二一三

け

啓蒙思潮……一〇二—一〇三
ゲエテ……一九・一二三
ケプラア……八一

こ

「古事紀」……一〇
ゴシック建築……一六〇—一六一
コッサ……二三
コペルニカス……八一
コリジアム……二四
ゴルスワアシイ……六五・二〇二
コルネイユ……一〇九
闇龍……八二
コンスタンテイン大帝……三二

さ

サイモンズ(アァサア)……一九四
サイモンズ(ジョン・アディントン)六七—七二・七七・八三
サッフォ……一八六
三一致……一〇六
三十年戰爭……一〇〇

し

「ジアン・クリストフ」……二一五—二一六
宗教改革……九六—九八・一〇〇・一一七

十字軍……五七
ジウス……一七九
沙翁……八五・九八・一〇七
シエンキキッツ……二三
自然主義……一一六・一二〇―一二一
「死の勝利」……一九四
ジヤヤンム（フランシス）……二一三
シユアレス（アンドレ）……二一三
ジユリアン……三二―三八・四八
ショウ……一四三・一六九―一七一・一九九・二〇〇
ショペンハウエル……一六七
シルレル……四・四九―五〇・一三九
「人生派」……二一一―二一五
秦の始皇……五六
新プラトオン派……四〇・四二・四四―四八
「シムボリズム」……一三四

す

スキンパアン……六三
スコラ哲學……五七―五八
ストラウス……二〇二
スパルタ人……一九〇
「スフィンクス」……六
スペンサア……八五

せ

清教徒……九八
ゼエムス……一三三
セルヴァンテス……八四
「センタウル」……六
セント・ソフィア……三八

そ

ソオニア……九
ソクラテス……一四一・一八六
ソフォクリイズ……七九・一三八・一五〇
ソロン……一六二

た

ダアキン……一六八
タアレス……一三
ダイオニサス（ディオニソスを見よ）
第三帝國……三六―三八・一六九―一七一
タレンタム……二八
ダンテ……八四
ダンヌンチオ……一九三―一九五
耽美派（耽美主義）……一八一・一八四―一八五
「タンホイゼル」……六二・七五

ち

「チヤイルド・ハロルド」……二三
超人……一六七―一七二

つ

「ツァラトストラ」……一六七
「罪と罰」……九

て

ディオニソス……一一・一四七―一四八
ティヌ……二〇四
デカルト……一〇二
テニスン……九
デルファイ神殿……一二

ど

ドウビユツシイ……二〇二
ドストエフスキイ……九

ドナテルロ……八八
トマス・ア・ケンピス……九七
トムスン(フランシス)……二一七
ドライデン……一一〇
「ドリアン・グレイ」……一九三
トリスタンとイソルデ……六二
トルウバドオル……六二

な

ナアシッサス……一九〇

に

ニイチエ……一九・九九・一二三・一四七・一五六・一六〇
一六五―一六八・一九七・二〇〇
ニイロ(子ロを見よ)
ニヂンスキイ……二〇二

ね

子ロ……二二・二三・二七

は

ハアキユリズ……一七三・一八〇
パアセノン……三八
ハイネ……六三
ハイペシア……三九―四二
パイロン……八・二三・六〇
パウロ(保羅)……一八・一八六
パクスト(レオン)……一九五―一九六
バタイユ(アンリ)……二一三
ハムレット……二一〇
パレス(モオリス)……一八一―一八三・二〇七・二〇八・二一三
「ばん」の神……六・二八・三〇―三一

ひ

フィリップス(スティイヴン)……二二
フランシス上人……九三
ヒュイスマンス……二一七
ピユリタン(清教徒を見よ)
ピヨルクマン……一二七・一三七

ふ

「ファウスト」……三四・五九・六一
ファラア……二三
フィディアス……一八七・一九〇
ブウエリエ……二〇二
ブラウニング(ロバアト)……九三・一三〇
ブラウニング夫人……三〇
ブラクシテレス……一九〇
プラグマティズム……一三三
プラトオン……四五・七九・一三二・一四一・一八六・一八九
フランク……二一四
フランシス上人……五四―五五
フランス(アナトオル)……一四三
ブルゼエ……一三七・二〇八
プロタゴラス……一六三
プロティヌス……四五―四八
プロメシアス……一七八―一八〇

へ

ペイコン……一〇二・一〇三
ペイタア……七四―七五・八七・一四四・一八七・一九二・二〇一
ペエトホオフェン……二一五
ペギイ……二一一
ペトラルカ……八四
ペトレヘム……二六・二七
ヘラクライトス……一四一

ペリクリイズ……二〇
ペルグソン……一二八・一三三・一三七・二〇〇・二二〇
ヘレン……六八
ヘロドタス……一八六

ほ

ボアロオ……一〇九
ボアンカアレ……一三三
ホキットマン……一三四―一三六
ボオ……一七
ボオドレエル……六〇
ボオブ……一一〇
ホオマア……二〇・七九・一六三・一七七・一八六・一九五
法王……五六
「ポスト・イムプレッショニスト」……二〇二
ボッカチオ……八四
ホラティウス……一〇九・一五六
ボルドオ(アンリ)……二〇七

ま

マアテルリンク……九〇―九二・一二四・一二八・一三七・一四〇・一五〇・二〇二
マアロウ……五九・六〇―六一・八四
マキアヴェリ……九九
マクシモス……三四・三六―三八
「マンフレッド」……八

み

ミケランゼロ……八八
ミルトン……二九
ミルボオ(オクタアヴ)……二〇七

む

ムリリヨ……八七

め

メディチ……七九
メフィストフェレス……六〇
メレジコウスキイ……二六・三三・三八―三九・一七三
メレディス……一

も

モオパッサン……二〇四
モリエエル……一〇九
モンテイヌ……八四
「モンナ・ヴンナ」……九〇―九二

ゆ

ユウゴオ……七五
「ユウゼニックス」……一六九

よ

約百(ヨブ)……一七八―一八〇

ら

「ラオコオン」……一四四
ラシイヌ……一〇九
ラスキン……四・一五六・一六一・一八八
ラスコルニコフ……九
ラファエル……八六・八七
ラプレイ……八四

り

リベラ……八七

る

ルイ(ピエル)……一九五

路易十四世……一〇九
ルウテル……九三・九六
ルウベンス……八八
ルッソオ……一一四・一七四
ルナン……二〇四

れ

レオナルド・ダ・ヰンチ……八七
レッシング……一四四
レニエ……二〇二
レンブラント……八八

ろ

露西亞舞踊……二〇二
ロッヂ（オリヴア）……一三三
ロッド……一三八
ロティ（ピエル）……二〇三
ロデン……一九一・一九二・二〇二
ロバアトソン……一三一
「ロマンティシズム」……一一二・一一五・一一九
ロラン（ロマン）……二一五・二一六
ロンサル……八四

わ

ワイルド……一九三
ワゲ子ル……六二

文藝思潮論索引終

大正三年四月二十五日印刷
大正三年四月二十八日發行

文藝思潮論
定價金壹圓

京都市高台寺北門前下河原東へ入ル
厨川辰夫

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地
大日本圖書株式會社
右代表者
專務取締役　宮川保全

不許複製

發行所
東京市京橋區銀座壹丁目二十二番地
大日本圖書株式會社
郵便振替東京二一九番

角
コ,223

定期刊行

■帝國文學　毎月一日發行
明治二十八年一月創刊
帝國文學會編輯
一册金貳拾錢　郵稅金壹錢五厘

■倫理講演集　毎月十日發行
明治三十三年五月創刊
丁酉倫理會編輯
一册金拾五錢　郵稅金　壹　錢

■教育研究　毎月一日發行
明治三十七年四月創刊
初等教育研究會編輯
一册金貳拾錢　郵稅金壹錢五厘

■心理研究　毎月一日發行
明治四十五年一月創刊
心理學研究會編輯
一册金拾五錢　郵稅金　壹　錢

大日本圖書株式會社

52

902
K69

終